

日本文学名著
日汉对照系列丛书

風立ちぬ

■日本文学感觉派代表作，
作者亲历的生离死别。男主人
人公陪伴未婚妻节子在山中
疗养，二人共同在疾病中寻
觅生的幸福而又不得不面对
死亡，描绘了二人对幸福的
向往、对现实的无奈、对自
我的反思和对爱情的忠贞。

起

風

堀辰雄 ■ 孟瑾 ■

 吉林大学出版社

日本文学名著
日汉对照系列丛书

風立ちぬ

起风

■日本文学感觉派代表作。
作者亲历的生离死别。男主人公陪伴未婚妻子在山中疗养，二人共同在疾病中寻觅生的幸福而又不面对死亡。描绘了二人对幸福的向往，对现实的无奈，对自我的反思和对爱情的忠贞。

堀辰雄 著 孟瑾 译

◎ 吉林大学出版社



图书在版编目(CIP)数据

起风/(日)堀辰雄著;孟瑾译. —长春:吉林大学出版社, 2009.1

(日本文学名著日汉对照系列丛书)

ISBN 978-7-5601-4032-2

I. 起… II. ①堀…②孟… III. ①日语-汉语-对照读物②短篇小说-作品集-日本-现代 IV. H369.4: I

中国版本图书馆CIP数据核字(2008)第201933号

日本文学名著日汉对照系列丛书

起 风

-
- | | |
|---------|--|
| ◎作者 | 堀辰雄 |
| ◎译 | 孟瑾 |
| ◎责任编辑 | 刘冠宏 |
| ◎责任校对 | 刘冠宏 |
| ◎封面设计 | 张沐沉 |
| ◎版式设计 | 林宁 王阿娜 张鑫 孙明晓
王鑫 贾萍 李雪 王汐 |
| ◎出版发行 | 吉林大学出版社 |
| ◎社址 | 长春市明德路421号 |
| ◎邮编 | 130021 |
| ◎发行部电话 | 0431-88499826 |
| ◎网址 | http://www.jlup.com.cn |
| ◎E-mail | jlup@mail.jlu.edu.cn |
| ◎印刷 | 长春市华艺印刷有限公司 |

版权所有 翻印必究

150mm×230mm 16开 4.875印张 114千字

2009年01月第1版 2009年01月第1次印刷

ISBN 978-7-5601-4032-2

定价: 15.00 元

出版者的话

语言是为交流而生的。原始的人们，必是由于郁郁乎有感于心，岌岌乎有危及身，手舞之足蹈之而不达其意，便佐之以喉舌了。至于那有感于心的是爱是恨，有危及身的是兽是敌，我辈几万年后恐怕难以妄加猜测。总之，咿呀呼喝，渐成定式。以警以劝，极得其便；以歌以咏，曲尽其情。这便是今人所说的语言了。

而就古人的交流范围而言，不过是一个部族。因此，语言自诞生之初便是因部族而异的。至今，中国的少数民族地区仍然存在着隔山不同语过河非乡音的情形。此后，私财积，政权生，征伐起，海内一。于是，王权下的语言在不同部族间渐渐统一融合，语言的差异便主要体现在国家之间了。由于语言的不解，异邦之间感觉神秘，出现误会，甚至由无知而仇视。

解除外国人在本土人眼里的神秘、误解，当然需要交流。学语言，是交流所需。而学语言的过程本身，也是交流。最简单的问候语，往往是一国风土人情的缩影；名家的小说文章，则是欣赏美文和解读社会的阶梯。

日本与中国不过一苇可航之遥，文化交流源远流长。吉林大学是中国名校，日语教育素建伟勋。此次由吉林大学出版社组织出版的日本名著日汉对照系列丛书，既立意于促进日语学习，又便于大众欣赏日本名家美文，其意义深远。

本丛书选译了田山花袋的《棉被》，泉镜花的《高野圣僧》、《歌行灯》，樋口一叶的《浊流》、《十三夜》、《青梅竹马》，岛崎藤村的《破戒》，森鸥外的《舞女》、《山椒

大夫》、《高濂舟》，夏目漱石的《我是猫》、《少爷》，芥川龙之介的《罗生门》、《鼻子》、《山芋粥》、《蜘蛛丝》、《地狱图》、《河童》，梶井基次郎的《柠檬》、《有城楼的市镇》、《冬天》、《冬天的苍蝇》、《崖上的情绪》，横光利一的《蝇》、《太阳》、《头与腹》，堀辰雄的《起风》，川端康成的《伊豆舞女》、《雪国》，大江健三郎的《万延元年的足球》等，都是日本自明治到现代有代表性的作家作品。

这些作家作品在创作思想上移风易俗，在表现技法上不乏创新。因而，有的语言表述悖于常规，有的用词艰涩语、意叠积，有的意境微妙难以言传，给对译工作增加了不少难度。译者虽尽心努力，但水平所限，译文难免有不妥之处，还望读者指正。

吉林大学出版社

2008年10月

序 言

堀辰雄（1904-1953），日本昭和初期著名感觉派作家，主要作品有《美丽村庄》（『美しい村』，1933年）、《起风》（『風立ちぬ』，1936-1938）、《菜穗子》（『菜穂子』，1941年）等。

堀辰雄在高中时代即得到日本名作家室生犀星、芥川龙之介的赏识，其间在关东地震中丧母的经历，对此后其文学的形成都有深远影响。1925至1929年在东京大学国文系学习，与日本昭和时期两个主要流派无产阶级文学派和艺术派都建立了联系，为自己独特风格的形成打下基础。1926年，与中野重治等人创办《驴马》杂志，作品受现代主义影响较大。1930年，出版小说集《笨拙的天使》，并取材作家芥川龙之介的自杀及自身经历创作了《神圣家族》，受到名作家横光利一的赞赏，在文坛崭露头角。此后，因肺病常去轻井泽疗养。1933年6月，在轻井泽认识矢野绫子，随后开始《美丽村庄》的创作，并有其他作品发表。1934年9月，与矢野绫子订婚。因绫子也患肺病，二人于1935年7月赴八岳山麓的富士见高原疗养所住院疗养。同年12月，绫子病故。这段生离死别、刻骨铭心的爱情故事，就成为其代表作《起风》的基本素材。1941年，发表了描写现代已婚女性追求在家庭中的独立的小说《菜穗子》，展现了文学才华。战后因病重，几乎没有作品问世。

《起风》是堀辰雄的代表作。小说在1936年12月至1938年4月期间，分四次在《改造》、《文艺春秋》、《新女苑》、《新潮》等不同刊物上发表，并最后整理成篇。作品描写男主

人公陪伴未婚妻节子在山中疗养，二人共同在疾病中寻觅生的幸福而又不得不面对死亡，描绘了二人对幸福的向往、对现实的无奈、对自我的反思和对爱情的忠贞。小说笔触细腻，情透纸背，使整个作品有一种铭心刻骨的悲怆凄婉气氛。作品以大量的心理描写直击爱情中人的内心世界，反映出作者显著的心理主义倾向，特别是最后部分中里尔克“安魂曲”的登场，为男主人公找到心灵归宿，使全篇归结于哲理反思之中。

《起风》在日本经久不衰，两次被搬上银幕。1954年，由久我美子主演的《起风》，首次登上银幕。1976年，《起风》由著名影星山口百惠主演，再次风靡日本，后在中国以《风雪黄昏》为名公映。而《起风》一词也因这部小说的诠释，具有不惧艰险顽强生存的涵义，并因这部小说及电影的影响而极具生命力。以《起风》命名的现代文艺作品包括松田圣子的写真集、个人歌曲专辑，2001年播放的另一题材的电视连续剧，2008年中村中的个人专辑等。

在《起风》翻译过程中，译者尽力保持了原文的细腻风格，而文风也着意向近代靠拢。其中，男主人公吟诵的诗句，“纵有疾风起，人生不言弃。”是全文的文眼，译者几易其稿，最终才确定下来。对里尔克“安魂曲”的翻译，也进行了一些调整以尽量满足韵律的需要。另外，男主人公在心里独白中对未婚妻以“病人”相称，译文按照中文表达习惯以女主人公的名字“节子”译出。

由于译者水平所限，译文难免有这样那样的问题，敬请读者提出宝贵意见。

译者

2008年10月于长春

目录 | 起风 QI FENG



序曲·····	2
春·····	12
風立ちぬ·····	34
冬·····	88
死のかげの谷·····	122

序曲

それらの夏の日々、一面に^{すすき}薄の生い茂った草原の中で、お前が立ったまま熱心に絵を描いていると、私はいつもその傍らの一本の^{いちょう}白樺の木蔭に身を横たえていたものだった。そうして夕方になって、お前が仕事をすませて私のそばに來ると、それからしばらく私達は肩に手をかけ合ったまま、遥か^{あかねいろ}彼方の、縁だけ茜色を帯びた入道雲のむくむくした塊りに覆われている地平線の方を眺めやっていたものだった。ようやく暮れようとしかけているその地平線から、反対に何物かが生れて来つつあるかのように……

そんな日の或る午後、（それはもう秋近い日だった）私達はお前の描きかけの絵を画架に立てかけたまま、その白樺の木蔭に寝そべて果物を齧^かじっていた。砂のような雲が空をさらさらと流れていた。そのとき不意に、何処からともなく風が立った。私達の頭の上では、木の葉の間からちらっと覗いている^{あじいろ}藍色が伸びたり縮んだりした。それと殆んど同時に、草むらの中に何かがぼったりと倒れる物音を私達は耳にした。それは私達がそこに置きっぱなしにしてあった絵が、画架と共に、倒れた音らしかった。すぐ立ち上って行こうとするお前を、私は、いまの一瞬の何物をも失うまいとするかのように無理に引き留めて、私のそばから離さないでいた。お前は私のするがままにさせていた。

風立ちぬ、いざ生きめやも。

ふと口を^{くち}衝いて出て來たそんな詩句を、私は私に^{もた}靠れているお前の肩に手をかけながら、口の裡で繰り返していた。それからやっとお前は私を振りほどいて立ち上って行った。まだよく乾いてはいなかったカンヴァスは、その間に、一めんに草の葉をこびつかせてしまってい

序曲

在那些夏日里，在弥望着茂密芒草的草原中，当你站在那里专心致志地作画的时候，我总是躺在旁边一株白桦的树荫下。而到了傍晚，你结束了工作，来到我身边。然后，我们就互相搂着肩膀，一动不动地眺望远方那被密密匝匝、只有边缘带着暗红色的积雨云团覆盖着的地平线。似乎从那终于走向黄昏的地平线上，反而有什么正在悄然诞生……

就在那些日子里的一个下午（那时已经接近秋天），我们把你尚未画完的画立在画架上，侧卧在那株白桦的树荫下吃着水果。如沙的碎云从天空轻轻飘过。这时，起风了，出人意料，不知所从。在我们头上，树叶间偶尔可见的蓝色时展时缩。几乎与之同时，我们听到了草丛中有什么东西“啪”地倒下的声音。那声音，极像我们放在那里的画随着画架一起倒下的声音。你欲马上起身过去，但我硬是拉住你，就像不想失去眼前转瞬即逝的什么东西似的，不让你从我身边离开。你顺从了我。

纵有疾风起，人生不言弃^①。

我把手搭在你紧靠着我的肩上，嘴里重复着这脱口而出的诗句。而后，你终于挣开我，站起来，走了。还没有完全凝固的油彩，在这会儿已经粘满了草叶。你把它重新立在画架上，一边用版刀费力地除去草叶，一边蓦然回头对我莫名其妙地微微笑着，说道：

“啊！要是让你父亲看到咱俩在一起他会怎样

①据辰雄的诗句，是对法国诗人瓦雷里的《海滨墓园》里的一句“起风了，好好活下去”的误译。如按字面解释，意思正好相反，是“起风了，活下去吗？就不了。”译者根据全文意境仍按瓦雷里诗意翻译，而为反映其俳句文体，做了仿古典五言诗的处理。

風立ちぬ

た。それを再び画架に立て直し、パレット・ナイフでそんな草の葉を
と
除りにくそうにしながら、

「まあ！こんなところを、もしお父様にでも見つかったら……」

お前は私の方をふり向いて、なんだか曖昧な微笑をした。

「もう二三日したらお父様がいらっしゃるわ」

或る朝のこと、私達が森の中をさまよっているとき、突然お前が
そう言い出した。私はなんだか不満そうに黙っていた。するとお前
は、そういう私の方を見ながら、すこし囁れたような声で再び口を
きいた。

「そうしたらもう、こんな散歩も出来なくなるわね」

「どんな散歩だって、しようと思えば出来るさ」

私はまだ不満らしく、お前のいくぶん気づかわしそうな視線を自
分の上に感じながら、しかしそれよりももっと、私達の頭上の梢が
何んとはなしにざわめいているのに気を奪られているような様子を
していた。

「お父様がなかなか私を離して下さらないわ」

私はとうとう焦れたいとでも云うような目つきで、お前の方を見
返した。

「じゃあ、僕達はもうこれでお別れだと云うのかい？」

「だって仕方がないじゃないの」

そう言ってお前はいかにも諦め切ったように、私につとめて微笑ん
で見せようとした。ああ、そのときのお前の顔色の、そしてその唇の
色までも、何んと蒼ざめていたことったら！

「どうしてこんなに变っちゃったんだろうなあ。あんなに私に何
もかも任せ切っていたように見えたのに……」と私は考えあぐねた
ような恰好で、だんだん裸根のごろごろし出して来た狭い山径を、
お前をすこし先きにやりながら、いかにも歩きにくそうに歩いて行
った。そこいらはもうだいぶ木立が深いと見え、空気はひえびえと

呢？”

“再过两天，父亲就该回来了！”

一天早晨，我们正在森林里漫无目的地散步，你突然说出这句话。

我沉默着，似乎有点不高兴。

于是，你一边看着我，一边用略带嘶哑的声音开口说道：

“那样的话，就不能再这样散步了。”

“散散步还不至于被限制吧？”

我还是有点生气，虽然在我身上感到了你带着几分关心的视线，但是相比之下，看上去似乎更在意头上树梢发出的娑娑声响。

“父亲非常不愿意让我离开他。”

我终于用近乎焦躁的眼神回头看着你。

“那么说，我们就就此分手吗？”

“可是，没有办法啊。”

这样说着，你努力地微笑着，试图证明你真的主意已定。啊！那时你的面庞的颜色、甚至你嘴唇的色彩，都是那么的苍白！

“怎么会变成这样呢：看上去已经把一切都交给了我，可……”

在裸根横七竖八越来越多的狭窄山路上，我让你走在前面不远的地方，以苦苦思索的姿态，极其艰难地走着。那一带看上去树丛很深，空气冷飕飕的，到处都有沼泽侵袭。突然，我头脑里闪出这样一个念头，你在今年夏天才偶然遇到我，你对我这样的人那么顺从，那么对你父亲以及包括父亲在内、不断支配着你的所有人，该不会都像这样，不，该是更多、更多地，老老实



していた。ところどころに小さな沢が食いこんだりしていた。突然、私の頭の中にこんな考えが閃いた。お前はこの夏、偶然出逢った私のような者にもあんなに従順だったように、いや、もっともっと、お前の父や、それからまたそういう父をも数に入れたお前のすべてを絶えず支配しているものに、素直に身を任せ切っているのではないだろうか？……「節子！そういうお前であるのなら、私はお前がもっともっと好きになるだろう。私がもっとしっかりと生活の見透しがつくようになったら、どうしたってお前を貰いに行くから、それまではお父さんの許に今のままのお前であるがいい……」そんなことを私は自分自身にだけ言い聞かせながら、しかしお前の同意を求めでもするかのように、いきなりお前の手をとった。お前はその手を私にとられるがままにさせていた。それから私達はそうして手を組んだまま、一つの沢の前に立ち止まりながら、押し黙って、私達の足許に深く食いこんでいる小さな沢のずっと底の、下生の羊歯などの上まで、日の光が数知れず枝をさしかわしている低い灌木の隙間をようやくのことで潜り抜けながら、斑らに落ちていて、そんな木洩れ日がそこまで届くうちに殆んどあるかないか位になっている微風にちらちらと揺れ動いているのを、何か切ないような気持で見つめていた。

それから二三日した或る夕方、私は食堂で、お前がお前を迎えに来た父と食事を共にしているのを見出した。お前は私の方にぎごちなさそうに背中を向けていた。父の側にいることがお前に殆んど無意識的に取らせているにちがいない様子や動作は、私にはお前をついぞ見かけたこともないような若い娘のように感じさせた。

「たとい私がその名を呼んだにしたって……」と私は一人でつぶやいた。「あいつは平気でこっちを見向きもしないだろう。まるでもう私の呼んだものではないかのように……」

その晩、私は一人でつまらなそうに出かけて行った散歩からかえ

实地把自己完全交付出去的吧？

“节子！如果你就是这样的姑娘，我会更加更加喜欢你的。等我对生活有了更可靠的把握，无论如何会娶你的。所以，你只管一直在父亲身边，就像现在这样……”

我一边对自己暗自说着这些话，却一边像征求你的同意似的突然抓起你的手。你任由我那样抓住你的手，然后，我们就这样手牵着手，在一片沼泽前止步伫立，一言不发，用一种说不出的心情注视着。

阳光费力地穿过无数枝条交错的低矮灌木的缝隙，稀稀落落地洒在我们脚下深浸着的小沼泽最底部，在树根下生长着的羊齿草之类的杂草上面。那团穿过树隙投到那里的光影，被似有似无的微风娉娉地摇动着。

此后两三天的一个傍晚，我在餐厅里看到你和来接你的父亲一起就餐。你无情地用后背对着我。一定是在父亲身边使你几乎无意识地做出的姿态和动作，让我感到了从未见过的、像小女孩儿一样的你。

“要是我喊你的名字……”我一个人地自言自语。

“也许你会依然如故而不看这边吧。仿佛不认为我在呼唤你……”

那天晚上，我一个人百无聊赖地出去散步，回来后又信步徘徊在无人的旅馆院子里。野百合散发着香气，我漠然地凝望着旅馆还发出灯光的两三个窗口。不知不觉间，好像起雾了。窗口的灯光似乎对雾有着恐惧，一个接一个地熄灭了。

而在我以为整个旅馆终将一片漆黑的时候，轻轻

風立ちぬ

って来てからも、しばらくホテルの人けのない庭の中をぶらぶらしていた。山百合が匂っていた。私はホテルの窓がまだ二つ三つあかりを洩らしているのをぼんやりと見つめていた。そのうちすこし霧がかかって来たようだった。それを恐れでもするかのように、窓のあかりは一つひとつ消えて行った。そしてとうとうホテル中がすっかり真っ暗になったかと思うと、軽いきしりがして、ゆるやかに一つの窓が開いた。そして薔薇色の寝衣らしいものを着た、一人の若い娘が、窓の縁にじっと^よ凭りかかり出した。それはお前だった。……

お前達が発って行ったのち、日ごと日ごとずっと私の胸をしめつけていた、あの悲しみに似たような幸福の雰囲気を、私はいまだにはっきりと^{よみがえ}蘇らせることが出来る。

私は終日、ホテルに閉じ籠^{こも}っていた。そうして長い間お前のために打棄^{うちや}って置いた自分の仕事に取りかかり出した。私は自分にも思いがけない位、静かにその仕事に没頭することが出来た。そのうちにすべてが他の季節に移って行った。そしていよいよ私も出発しようとする前日、私はひさしぶりでホテルから散歩に出かけて行った。

秋は林の中を見ちがえるばかりに乱雑にしていた。葉のだいぶ少なくなった木々は、その間から、人けの絶えた別荘のテラスをずっと前方にのり出させていた。菌類の湿っぽい匂いが落葉の匂いに入りまじっていた。そういう思いがけない位の季節の推移が、——お前と別れてから私の知らぬ間にこんなにも立ってしまった時間というもの、私には異様に感じられた。私の心の裡^{うち}の何処かしらに、お前から引き離されているのはただ一時的だと云った確信のようなものがあって、そのためこうした時間の推移までが、私には今までとは全然異った意味を持つようになり出したのであろうか？ ……そんなようなことを、私はすぐあとではっきりと確かめるまで、何やらぼんやりと感じ出していた。

私はそれから十数分後、一つの林の尽きたところ、そこから急に打

的一声窗框响，一扇窗户缓缓地打开了。一位身着蔷薇色、睡衣的年轻姑娘，紧紧抓着窗框探出身来，那就是你……。

你们离开之后不久，我的心中一天一天地充溢着那种类似悲伤的幸福。这种感觉，我今天仍然能够清清楚楚地召回。

我终日闷在旅馆里，开始处理自己长期以来为你而中断的工作。我自己都想不到，我竟能平静地埋头于工作。不知不觉中，一切转入另一个季节。于是，终于在要出发的前一天，我走出旅馆去做久违的散步。

秋天使树林中杂乱不堪，几乎让人感到陌生。叶子稀疏的树木，让远方不见人影的别墅阳台从树木之间探将出来。菌类湿乎乎的味道和落叶的气味混杂在一起。这种意想不到的季节变换——和你分手之后不知不觉之间如此逝去的时间，令我感到诧异。在我心中的某个地方，有一种坚定的信念，那就是离开你只是一时的。所以，是否因此而使得这样的时间推移也变得具备了对我而言与以往迥异的意义呢？……这些事情，直到我事后清楚地确认之前，一直令我感到一种莫名的恍惚。

十几分钟后，我走出一片树林的尽头。从那里便突然开阔起来，远远的地平线遥望如带。草原上生长着一片茂密、弥望的芒草，我步入其中，在旁边一株白桦树荫下躺着。白桦的叶子已经开始变黄，那就是在那个夏天的每一天，我一边凝视着你作画一边像现在这样躺着的地方。当时几乎总是被积雨云遮盖的地平线，现在则是不知何处的远山，在随风摇摆着雪

風立ちぬ

ちひらけて、遠い地平線までも一帯に眺められる、一面に^{すすき}薄の生い茂った草原の中に、足を踏み入れていた。そして私はその傍らの、既に葉の黄いろくなりかけた一本の白樺の木蔭に身を横たえた。其処は、その夏の日々、お前が絵を描いているのを眺めながら、私がいつも今のように身を横たえていたところだった。あの時には殆んどいつも入道雲に遮られていた地平線のあたりには、今は、何処か知らない、遠くの山脈までが、真っ白な穂先をなびかせた薄の上を分けながら、その^{りんかく}輪廓を一つ一つくつきりと見せていた。

私はそれらの遠い山脈の姿をみんな暗記してしまう位、じっと目に力を入れて見入っているうちに、いままで自分の裡に潜んでいた、自然が自分のために極めて置いてくれたものを今こそ漸^やつと見出したと云う確信を、だんだんはつきりと自分の意識に上らせはじめていた。……